

|         |            |
|---------|------------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 033    |
| 区分      | 診断         |
| タイトル    | 簡便法の提案     |
| 著者      | 八木素萌       |
| 作成日     | 1991.05.16 |

### ◎簡便法の提案

- 【1】四診法を検討してみると切経診以外の方法で診ているのは、問診を除けば五行（病因・五臓・六経）の辨別に他ならない。
- 【2】臓腑の五行と病因の五行には、五行の同類性によって共震し共鳴するものであるから、生理的病理的反応の五行表現は、たとえば、「木」と「水」とか、「金」と「火」とか、「土」と「金」とか、「火」と「土」とか等のように複合的に現象したり、単一的な表現を見せたりする。これらの場合を考察すれば、複合的に表現されている場合には、どちらかが病臓であれば今一つは病因を示している。
- 【3】主訴や症候を漢法医学的に解析するには、かなりの水準の理論的力量と臨床的経験が必要であり、また、脈診も微妙で複雑なものであるから熟練と学問的かなりの高い水準が必要である。故に、学術水準と経験とが初歩的なものや基本的なものの程度であっても、実行できる適確な診断と治療の方式が構成されることが是非とも必要である。そのような診療システムの構築は可能であると考え。それは、切診（触診を主としたもの、脈診は極度に簡便化したものでも有用であるが、省略しても良い）による診断情報を基軸にした診療システムの構築に他ならないのである。
- 【4】五臓・五行を分類する切診法としては、
- a：八虚診がある、
  - b：難経腹診と、入江小田法腹診がある、
  - c：背候診がある。
- これらを舌診や尺皮診（尺膚診）や蒙色診や要穴切診（五腧穴の原穴と自穴と郄穴と絡穴を主に診る）などと勘案する。
- 【5】経脈的変動を把える切診法は、
- a：要穴切診
  - b：要穴部位（肘・膝より末端部にかけた部位）の撮診と撫擦診（主に経脈流注部の皮膚温・梗結などを診る、他には皮膚の乾湿や滑濇やタルミと過緊張や皮肉の接続具合も診る）

c：主要な代表反応穴の圧痛反応を診る。

◇手太陰：経渠・尺沢

◇手厥陰：労宮・大陵

◇手少陰：陰郄・少海

◇手陽明：合谷・曲池・陽谿

◇手少陽：液門・支溝

◇手太陽：前谷・後谿

◇足太陰：公孫・商丘・漏谷・三陰交

◇足厥陰：行間・中封・中都

◇足少陰：水泉・太谿・築賓

◇足陽明：内庭・三里から下巨虚まで

◇足少陽：丘墟・陽輔・陽交

◇足太陽：僕参・崑崙・委中

◇督 脈：後谿・風府・腰俞

◇任 脈：承漿・曲骨・列缺

◇陰蹻脈：缺盆・陰包・交信・照海・腹部の胃経上

◇陽蹻脈：風府・風池・肩髃・巨骨・臑俞・居髃・跗陽・申脈・裏陽陵泉

◇陰維脈：天突・内関・築賓・腹部の脾経上・肝経上

◇陽維脈：風府・風池・臑俞・肩井・臂臑・天髃・居髃・外関・風市・陽陵泉・陽交

◇衝 脈：氣舎・臑俞・公孫・三陰交・腹部の脾経上・肝経上

◇帶 脈：章門・帶脈・五枢・維道・足の臨泣

d：運動診（経脈を自動または他動法で過伸展状態にして違和感や痛みや運動制限を診る）などの方法である。

【6】病因に対応する特異穴の切診問題には、

a ……外因の五行の反応に対応性の強い穴

風〈木〉：大敦、太衝

熱暑〈火〉：少府、労宮、神門、大陵

労倦・湿・食〈土〉：太白

燥涼〈金〉〔天空からの涼え〕：陽谿、合谷

冷寒〈水〉〔大地から冷え上って来る寒え〕：委中、京骨

の問題と、

b ……痰・飲・瘀・燥などの、内因による病つまり内傷病が具体的に発症する場合に病因物質として作動するもの、本来は病理・生理的産生物であるものに、特異的に反応する穴の問題とがある（痰：璇璣・華蓋・紫宮・豊隆、飲：中庭・上脘・豊隆、瘀：下委陽・痞根、燥：臚中）。

## 【7】気血の判定問題では

『鍼灸問対』（元：汪機）に「病ノ血分ニ在ルモノハ沈著シテ移ラズ 病ノ気分ニ在ルモノハ遊行シテ不定」「病風ヲ以テ之レヲ言エバ……移動シテ常ナラザル者ハ気分ナリ、……著シテ走ムカザル者ハ血分ナリ、凡ソ病ハ皆然ラザルモノ莫シ」と言う。そして「病ノ気分ニ在レバ」「上有病 下取之 下有病 上取之 在左 取右 在右 取左」、「在血分者 隨其血之所在 応病取之」と記述している。

## 【8】補瀉の決定問題

『難経』『八十一難』には補瀉の決定は病の虚実によれと言う。

病の虚とは病勢は遅滞して緩慢で症候も不明瞭で発症の様子も時期も定かでは無いもの、病の実とは病症候も変化も発症も激甚明確なもの、と「四十八難」に記述している。

また『鍼灸問対』は『内経』の説「形氣不足 病氣有余 是邪勝也 急瀉之 形氣有余 病氣不足 急補之……形氣有余 病氣有余 此陰陽俱有余也 急瀉其邪 調其虚実」を引用して「病氣不足」について補足説明を加えている。「夫レ形氣トハ 氣ハ口鼻中ノ喘息ヲ謂ウモノナリ 形ハ皮肉筋骨血脈ヲ謂ウモノナリ 形ノ勝ツモノハ有余ト為ス 消瘦スルモノハ不足ト為ス 其ノ氣ハ 口鼻中ノ氣ニ審ラカナリ 勞役シテ故ノ如キモノハ 氣ノ有余ト為スナリ 若シ喘息シテ氣促シ 氣短ニ 或ハ以テ息スルニ足ラザル者ハ 不足ト為ス 故ニ曰ク 形氣ナルハ 乃ワチ人ノ身形中ノ氣血ナリト 補スベク瀉スベキハ 此レニハ在ラズシテ 只ニ病ノ来潮シテ之レヲ作スノ時ニ在ルナリ……精神困窮シテ 語言ハ無力オヨビ懶語ノ者ハ 病氣不足ト為スナリ 乃ワチ真氣ノ不足ナリ 急イデ当サニ之レ補スベシ…」とあって平明である。

## 【9】基本鍼法（手技）とその選択問題

五臓に应ずる刺法、五体に应ずる刺法、四海刺法などは、病の深さと体成分の治療の刺法であろう。補法の手技手法は温補・清補・調和・平補・理氣・調氣・和強などに分類できよう。瀉法の手技手法は瀉熱・清熱・導排泄・壊決・壊血・瀉出・理血・緩結・解強急などに分類できよう。

同時にこれらの補瀉手法は接触・浅刺・深刺・水平刺・斜刺などの施鍼の深浅においても施術目的に対応させられるであろう。此のほか刺絡と燔鍼（劫刺）の格別な治効作用の適宜な運用と、毫鍼ほかによる経脈疎通刺法や導血氣刺法や輸氣血刺法や、湯液の八陣（八法）に対応した治法刺法手技も選定される。

## 【10】外感病の治療と撰穴問題

## 【11】内傷病の治療と撰穴問題